

# 視察先別報告 東ティモール

## 【技術協力プロジェクト／青年海外協力隊】

### 東ティモール国立大学工学部能力向上支援プロジェクト

#### 概要

独立に伴う混乱により教育の質が著しく低下したのを背景に、国内唯一の国立大学の工学部機械工学科で管理運営体制強化を目指し、2011年より実施している技術協力プロジェクト。施設や機材を用いた授業は十分になされておらず、緊急無償により導入された実習機材も効果的に活用出来ていない状況を改善するため、青年海外協力隊には、実習を授業に取り入れ、学生への指導をより効果的なものにするのが期待されている。

01

大浦 正人 プロジェクトの説明の中で「いつも集合時間が守られず、時にはドタキャンもある。しかもそれを悪いことだと思っておらず翌日は普通に挨拶される。」という事実を知りました。国の最高学府でそのような状況である事に驚きました。支援する日本人は、その現実を受け止め、諦めず目標に向かって努力していました。キャンパスの学生に話し掛けると嬉しそうに応じてくれます。工業機械に貼ってある使用方法を必死にメモを取っている学生や、片隅の机で一生懸命勉強している学生の姿を見て、やる気には差があるようですが、この国の明るい未来を感じる事が出来ました。このように学生が勉強出来るのも日本の支援があつての事です。

02

太田原 奈都乃 工学部は国造りを担う技術系人材育成のための重要な拠点だ。ここで河西隊員は、無償導入機材や施設などを活用した実習授業に初めて取り組み、生徒を前に確実な成果を出していた。河西隊員の任期終了後も現地教官の下で持続していくための準備が必要になると思う。  
また、現状の大学運営体制に対する継続的なフォローが必要だ。教官の基礎能力の向上に加えて、学生の学習達成度・卒業後進路状況等の把握を行っていくことで、東ティモール社会のニーズに応えた人材の育成を行うことができるはずだ。  
さらに教育現場における国際協力では、教官間の目標達成に対する温度差や時間に対する意識といった国民性の相違が特に大きな壁となっていることを知って驚いた。

03

川辺 絵梨 大学に限ったことではないが、東ティモールでは何かを学ぶ前に言語の問題が発生する。教科書はポルトガル語だが、教員はインドネシア語やテトゥン語で授業を行う。また、工学などの専門分野では英語が用いられている。このような状況下にも拘らず、専門知識を身に付けるため学ぶ学生たちには、質の高い教育が受けられるよう支援すべきだと思った。大学ではODAのシンボルマークやJICAのシールが貼られた機材をたくさん目にしたが、以前は倉庫にしまわれており活用されていなかったようだ。現在は、河西隊員が実習で使用しているとのこと。このように、物を供与するだけでなく、それを効果的に活用するためのフォローの必要性を目の当たりにした。そして、ここで学んだ学生が、東ティモールの発展に役立つ人材となってくれることを切に願う。

04

木村 みゆき 風間チーフアドバイザーの長年の功績と情熱、自分の人生をかけたと言っても過言ではないプロジェクトから国際協力の現場に体を張る日本人を見ました。河西啓至隊員も自主性を促す実習指導の工夫や情報の共有の仕組みなどに尽力されている様子でした。日本が誇る工学分野が東ティモールの基礎的な教育の質や言語問題や制度に阻まれ、教育の向上や高度な技術を有する人材の輩出になかなか結びついていない現状も見受けられました。国造りには初等教育の充実から始め、教育の更なる強化が必須であると考えます。

05

後藤 恵美 日本の大学での研究・教育経験を活かし、専門家として10年以上も同校の発展にご尽力されている風間先生にお会いすることができ、「働くこと」「生きること」について深く考えさせられた。定年退職後に、自分が現役時代に培った知識や経験を必要とする国のために働く……私自身の人生の目標を見つけられた気がする。また、そのような第二の人生の生き方があることを、ぜひ多くの人たちに知ってほしいと心から思った。教育改革には長い年月がかかるものである。長期的な視点を持って今後もこのプロジェクトを継続させて欲しいと願っている。

## The Democratic Republic of Timor-Leste

06

塩澄 志麻

「東ティモールの教授に分数の計算を教えたこともあります」と話してくれた風間教授。東ティモール国立大学工学部の教授は、30代から50代までで、過去に十分な教育を受けてきていないことが多い。大学には、日本の機器が多く入っており、JICAのロゴを多く目にする事ができた。しかし、その機器は日本でいう工業高校レベルのもの。それでも、そこにある機材で、東ティモールの教授に効果的な活用方法を伝えている。さらに、学生への指導をより効果的にするため、JICA技術協力プロジェクトと青年海外協力隊が連携している。ここはまさに、日本のチーム援助だと思った。

07

武田 義久

敷地内には、1999年の独立に伴う混乱によって破壊された校舎が生々しく残っていた。人材育成・能力向上が重点課題の一つとして位置づけられている東ティモール国内状況において、高度技術者の育成は、必要課題の一つである。大きな研修施設の中には、緊急無償資金協力や前プロジェクトで供与したJICAマークの付いた機材が多く設置されていたが、有効活用されていないように感じた。また、集中講義や現場見学、環境整備等で教育環境は改善されつつあるが、教官の基礎能力アップと、取得学位や勤続年数で待遇が決定し、定期的に評価されない中、如何にしてモチベーションを維持していくかが課題である。また、公用語はポルトガル語、テトゥン語、実用語はインドネシア語や英語が混在する中で、言語政策も大きな課題であると感じた。そして、風間専門家の自分の人生をかけて、多くの国で、使命感をもって国際協力に貢献されている姿勢に感銘を受けた。

08

田中 香織

先方に盛大に出迎えていただき、2006年から続く当プロジェクトへの期待と信頼を実感した。東ティモールの教育は、植民地化及び独立により最も影響を受けた分野だと言える。教員となる東ティモール人の教育レベルの問題や、頻繁に変更される公用語がもたらす現場の混乱には衝撃を受けた。しかし大学独特の雰囲気は日本と同じで、学生たちが真剣なまなざしで研究に励む姿や、友達と楽しそうにおしゃべりする姿を見ることができ安心した。ただ産業が未発展であるため、工学分野を学んだ学生たちが専門性を活かす仕事を手に入れることはなかなか難しいようだ。工学が日本の発展を支えてきたように、彼らが東ティモールの成長に寄与できるような機会を創出する社会環境の整備が重要な課題だと感じた。

09

藤島 誠人

このプロジェクトは、専門家と青年海外協力隊の両方が関わる案件である。東ティモール国立大学は、東ティモールで唯一の公的高等教育機関であり、無くてはならない機関である。以前東ティモールは、紛争により教育機関施設を含む物的インフラが7割以上を破壊された。また、インドネシアとの独立に伴いインドネシアから教えに来ていた教員の多くが自国に帰還してしまい、教育の質が著しく低下することになったとも言われている。現在は、ほとんど使われていなかった機材も教室に設置し、なるべく使うようにしていた。教員の質については年齢によって様々であるように感じた。教員は30代から50代で、その内40代から50代の教員は十分な教育を受けられなかった現状がある。しかし、少しずつ教員の基礎的能力が向上し、教員の質は改善傾向にあるようだ。

10

藤岡 裕巳

山口大学や岐阜大学との提携があることに驚いた。身近な所で東ティモールとの関わりがあることを嬉しく感じた。大学の雰囲気は非常に良く、多くの場所で学生が集い、勉強や会話を楽しんでいた。1人の学生が私に英語で話しかけ自己紹介などをしてくれた。英語を勉強中だと嬉しそうに話しており、学生の積極性を感じた。大学の授業はほとんどがテトゥン語で行われている。工業系の職業に就いた時に携わる言葉は英語なので、授業を英語で実施することもあるが、実際のところ英語での授業はごくわずか。しかしながら、英語が話せる学生が少しずつ増えてきたようである。また、大学の敷地内にソーラーパネル建設(太陽光プロジェクト)を行っていた。現在250kw+7.5kw発電しており(2014年10月から発電開始)、そのほとんどが大学で使用するという。大学の広い敷地を使った効率的なプロジェクトだと感じた。